

沖縄大学 二〇二二年度 一般選抜 (前期)

国語

※答はすべて解答用紙に書きなさい。

【問題】 つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

わたしたちはあれこれひとりで思い悩み、答えがどうにも出ないとき、その思い①煩いをだれか親しいひとにちよつとでもわかっただけでほしいと願う。「そうだ、そうだね」と他人にうなずいてもらいたい、相づちを打ってもらいたいと願う。他人に自分の思いを分かち合ってもらうことで、少しでもいいくらいよりは楽になりたいと思う。

ひとに自分のふさぎ(鬱ぎ)について聴いてもらおうと、たしかにその②コウカはある。聴いてもらうだけでちよつと楽になったというのは、だれもがしばしば経験することである。だから具体的に何ができるわけでもなく、せめてじっくり聴いてあげる、そして同じ思いに浸るというかたちで、そのひとのサポートをしてあげようとひとは考える。【 A 】「共感」や「同情」である。

英語に「シンパシー」(sympathy)という言葉がある。シンパシーはギリシヤ語の接頭辞 syn- と、同じくギリシヤ語の pathos を組み合わせた言葉で、苦痛や悲しみをもにするという意味である。symphony が音響を合わせるという意味で「交響曲」と訳され、synthesis が異なる考えを合わせるという意味で「総合」と訳されるのと同じように、sympathy は「共感」や「同情」と訳される。

けれども、「共感」とか「同情」というのは、はたして異なる思いを一つに溶け合わせるということとなるだろうか。「あなたの気持ち、わかります」と言うのは、「わたしはあなたと同じ気持ちです」「わたしはあなたに合意します」というふうに「思い」や「考え」を共有すること、合一化することと同じだろうか。

聴くことがもつとむずかしいのは、聴いても言葉を返しようがないとあらかじめわかっているときである。③重篤な病気になった友人、家族を失った被災者、子どもを失った両親、ホスピスの患者さん、くり返し病に冒される知人……。このひとたちの前に立ったとき、とつさにどう声をかけていいのかかわからず、怯んでしまう。まさに聴くことしかできないのである。【 B 】、ひたすら聴くということ、そのことには大きな意味がこもっている。

このような場合にじつと聴くのがむずかしいのには、いくつか理由がある。一つは、苦しみやふさぎの理由を問うても答えがないことは、話す本人がわかっているから。(a)

第二に、ひとはほんとうに苦しいときには話さないものである。(b)

第三に、迎え入れられるという確信のないところでは、ひとは他人に言葉をあずけないものだ。(c)そして最後に、とくに家族の場合、自分が漏らす一言一言を身内は聞き流すことができず、それらに過剰に反応してしまう。(d)

聴くというのは、それほどにむずかしいことである。が、それでもひたすら聴かねばならない。最後まで聴き切らねばならない。聴くだけ、言葉を受けとめるだけということが意味をもつのは、いったいどうしてか。

苦しみやふさぎのなかに④溺れてしまっているひとが、それでもそれについて語るためには自分の

苦しみやふさぎについて、どんなきつかけ、どんな経過でこんな苦しみやふさぎに襲われることになったのか、その理由と考えられるものは何か、いまはどんな状態か、というふうには、苦しみやふさぎから身を引きはがし、ことがらを時系列に並べ換え、整理して語らねばならない。このように自分の苦しみやふさぎにある距離をとり、それを対象化するなかで、それらとの関係が変わるということがここではとりわけ重要なのである。つまり、苦しみやふさぎを当初あったのとは別の地平へと移し変えるところに、他者を前におのれについて語ることの意味はある。語るということは、相手に回答をもらうということではない。見えない自分の姿を映すために、その鏡の役を相手にしてもらうことであるのだ。

が、鏡であるべき聴く者は、話の中身が重いし、【 C 】相手からなかなか言葉が漏れてこないで、その緊迫になかなか耐えきれない。身を固くしてじりじりと待つだけで疲れはててしまう。そのうち待ちきれなくなつて、「あなたが言いたいのはこういうことじゃないの？」と誘い水を向ける。話すほうはその明快な語り口について乗っけてしまう。「わかってもらえた」と。が、これはじつはもっともまずい聴き方なのだ。なぜなら、(1) 語ることの意味は、語ることによってみずからの閉塞から距離をとることにあるのに、そのチャンス聴く側が横取りしてしまうからだ。これでは聴くことにならない。

だれかに聴いてもらおうとひとが重い口を開くのは、何を言っても受け容れてもらえる、⑤リウウホをつけずに、反論もせず、とにかく言葉を受けとってくれる、自分がそのまま受け容れてもらえる、そういう感触を確認できたときである。このとき、相手に見守られている、自分が相手の関心の宛て先になっているということが大きな力になる。関心をもつひと、じっと待つてくれるひとの前ではじめて、ひとは口を開くのである。西洋のひとたちが関心のことをインタレストと呼ぶことには⑥含蓄がある。インタレストという語は、ラテン語の *inter - esse*、つまり相互的な存在であるということ (*inter - being*) からきているのだ。

聴くときに大事なものは、最後までつきあうことだ。《時間をあげる》ということだ。語る／聴くという関係のなかでは、「ふれあい」よりも、ずれや齟齬^{そご}すれ違いのほうが⑦ケンザイ化してしまう。が、このぎすぎすした関係を何度も経験することこそが大切なのだ。こういう⑧シコウサクゴのくり返しの果てにしか、ほんとうの意味で、語る／聴くという関係は生まれてこない。語りは信頼を前提とするが、信頼は言葉の積み重ねのなかでしか生まれてこないからである。そういう言葉のやりとりにかける時間を、ひとびとはなぜか惜しむようになっている。

言葉というのは不思議なもので、交わせば交わすほどたがいの違いが際立ってくる。たがいに理解しあうということ、相手のことをわかるといことは、相手と同じ気持ちになることだと思っているひとが多い。しかしそれは理解ではなく合唱みたいなものであって、同じものを見ていると感じることがこんなにも違うのかというふうには、違いを思い知らされることが、ほんとうの意味での理解ではないかと思う。

以前、友人の家族と会ったとき、母親が自分の息子を指さして「この子とは性が合いませんねん」と言った。このお母さんは⑨ステキだと思つた。ひとには言つてもわからないことがある、それを知つたうえでそれでもいっしょにいる。わからなくてもたがいの信頼が揺るがないことを肌で感じている……。性が合わなくてもいい、いや【 D 】合わなくて当然なのだ。

「納得」という言葉がある。「納得」というのは不思議な心持ちで、「あなたの言うことはわかるけ

ど、納得できない」と、わたしたちはしばしば口にする。逆に、「あなたの言っていることはわたしには肯う^{うへな}こととはできないけれど、でも納得はできる」とか「事はそれで解決したわけではないけれど、納得はした」と口にすることもある。

このように、「納得」にはどうも、事態の理解、事態の解決には尽きないものが含まれているようだ。

【 E 】 わかつてもらいたいと願って口を開いたひとが、「わかる、わかる」と相手にすらすら言葉を返されると、「そんなにかんたんにわかられてたまるか」と、逆に頑なになるのだろう。

ある家庭裁判所の調停員からおもしろい話を聞いたことがある。離婚の調停で、⑩双方がそれぞれの言い分をぶつけ合った果てに「⑪パンサク尽きた」「もうあきらめた」「いくら言ってももう無駄だ」と観念したとき、そのぎりぎりの⑫ケツレツのときにこそ、ほんとうの話しあいの途が微かに開けることがあるというのだ。訴え合いのプロセス、交渉のプロセスが尽くされてはじめて開けてくる途がある、と。

言葉のぶつけ合いの果てに、相手方のなかにその相手（つまり、このわたし）の心根をうかがうような想像力もしくは関心がふと芽生えたことを察知したとき、そしてこの⑬修羅場から降りずに、果てしなく苦しいこの同じ時間を共有してくれたことそのことにふと意識が及んだときに、「納得」ということが起こるというわけだろう。その意味では、「納得」は、事態の解決というより、その事態に自分とは違う立場からかかわるひととの関係のあり方をめぐって生まれる心持ちなのだろう。

聴くというのも、話を聴くというより、話そうとして話しきれないその疼きを聴くということだ。そして聴き手の聴く姿勢を察知してはじめてひとは口を開く。そのときはもう、聴いてもらえるだけでいいのであって、理解は起こらなくていい。妙にわかられたら逆に腹が立つというものだ。

こうして一つ、たしかなことが見えてくる。(2) 他者の理解とは、他者と一つの考えを共有する、あるいは他者と同じ気持ちになることではないということだ。むしろ、苦しい問題が発生しているまさにその場所にとともに居合わせ、そこから逃げないということだ。

こういう交わりにおいて、言葉を果てしなく交わすなかで、同じ気持ちになるどころか、逆に両者の差異がさまざまな微細な点で際立つてくる。「ああ、このひとはこういうときこんなふうに感じ、こんなふうに惑うのか」と、細部において、ますます自分との違いを思い知ることになる。それが他者を理解することなのである。そして差異を思い知らされつつ、それでも相手をもつと理解しようとしてその場に居つづけること、そこにはじめてほんとうのコミュニケーションが生まれるのではないかと思う。このことはもつと大きな社会的次元においても、つまり現代社会の多文化（マルチカルチュラル）化のなかで起こるさまざまな⑭葛藤や衝突のなかでも、同じように言えるはずだ。

（鷲田清一『わかりやすいはわかりにくい？——臨床哲学講座』二〇一〇年、筑摩書房。
ただし、作問にあたり一部改変した。）

問一 傍線部①から④の漢字にはひらがなで読みをつけ、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 【 A 】から【 E 】にあてはまるものを次のなかから選んで入れなさい。

【 けれども だから むしろ いわゆる しかも 】

問三 (a) (d) には、次に挙げた文が入ります。それぞれ、適切なものを次のア～オから一つずつ選んで記号で答えなさい。

ア ほんとうはそのことは考えたくない、忘れていたのに、他人に語ることで苦しみをわざわざ二重にすることはない。

イ 直接かかわらないで、ただじつと見ている、あるいは何もしないでただ横にいるということが、ポジティブな力になることがある。

ウ 「そんなこと思っていたのか。こっちの身にもなってくれ」と返され、そして「言わなきゃよかった」と二度と口を開かなくなる。

エ 「言ったってわかってもらえるはずがない」。それでもようやくと口を開いても、一言一言が相手にたしかに届いているか確認しながらしか話せないのです、どうしてもとつとつとした断片的な語りになってしまう。

オ なぜこのわたしばかりが病に冒されるのか、こんな状態でも生きつづけることは死ぬことより大事なのか……と問いただしても、だれも答えを返せないに決まっている。

問四 (1)「語ることの意味は、語ることによってみずからの閉塞から距離をとることにある」とあるが、そのことについて、文章中の言葉を用いて八十字程度で説明しなさい。

問五 (2)「他者の理解とは、他者と一つの考えを共有する、あるいは他者と同じ気持ちになることではないということだ。むしろ、苦しい問題が発生しているまさにその場所にともに居合わせ、そこから逃げないということだ。」とあるが、そのことについて、文章中の言葉を用いて一〇〇字程度で説明しなさい。

問六 この文章についてのあなたの意見や感想を二〇〇字程度で書きなさい。そのさい、「コミュニケーション」、「差異」の二語を用いること。